

# 布を巡る旅

第6回 ~ 中国 ~ 山の民の布仕事 西双版納・涼山

後藤ふたば



雲南省南端の西双版納<sup>シウサバナンナ</sup>少数民族自治州を初めて訪れたのは1989年。州都・景洪まで、昆明からバスで3日かかる遠い場所だった。

船に乗ってメコンを下った町の近くには哈尼族<sup>ハニ</sup>の村があり、ちょうど綿花の収穫後だったのか、道を歩く村人が若男女問わず、糸コマを回して糸を紡いでいた。どの家にも織機があり、女性たちが布を織っていた。

インドシナ各国も含めてこの一帯の山岳少数民族が織る布は、たいてい日本の反物に近い幅狭のものだ。手紡ぎの太めの糸を強く叩き込んで厚く頑丈な布にする。傾斜のきつい山中での自給自足の暮らしには、服は丈夫であることが大切だ。このしつかりした布を主に藍で染め、服に仕立てる。

本体は地味だが、様々な飾り、刺繍、パッチワークなどの技法を重ねて、民族ごとにまったく異なる衣装にする。藍が主体とはいえ、華やかな衣装にする民族も多い。この哈尼族の村でも、女性たちは銀色の小さな球をたくさん付けた紺色の服を着ている。紺と銀、アクセントに少しだけ赤。すつきり可愛らしいデザインだった。その後も折に触れ何度もこの地を旅

している。市の立つ日の村では、近くの山や谷から来た少数民族たちのファッションショーを見ることができる。雲南の山村を巡る楽しみである。

## 刺し子のマント

91年には四川省の涼山彝族自治州を旅し、布拖という町で彝族に出会った。ちょうど夏の祭の時期で、小さな町は民族衣装のプリーツスカートで溢れていた。この民族の衣装も紺が基調だった。町外れで布を織っている人を見つけた。木綿の縦糸に羊毛の横糸、うんと幅狭の固くて厚い布である。近くにいた人が自分のマントを指さしていたから、おそらくその素材だろう。それにしてもよく見るとすごい布だ。藍で

真っ紺に染め上げた後で、びっしりと刺し子をし、かっちり固く仕上げている。肩に小さい穴はあるが、腕が通る大きさではなく、引つ掛けるだけ。この形は女性だけのものである。

男女兼用のマントもある。プリーツをたっぷり入れた柔らかい毛織物で、色は主に白、稀に紺。ケープのように

上半身をすっぽり覆う。実に美しい。町には鮮やかな色彩の衣装に豪華な飾り物をつけた女性たちもいる。この豪華タイプの女性たちが、白のマントを羽織る。裕福な人とそうでない人との区別なのか、それともかつてあったという身分制度の名残なのか。祭りが始まった道端から固まって見守るだけの、圧倒的多数の紺マントの人の群れが印象的だった。

\* \* \*

一昨年、近代的なビルに生まれ変わった昆明の列車駅で、白マントを羽織って颯爽と雑踏の中を歩いて行く彝族の若い男性を見た。彼らがまだマントを着ていることがとてもうれしかった。世界の変化と共に、アジアの布事情も変わっていく。山の民たちはどんな民族衣装を脱ぎ捨てつつあるし、伝統的な布作りはもう殆ど失われてしまった。それでも、完全に消えてしまったわけではまだない。街道を逸れた道の奥にひっそりとそれはある。祈りをこめて、そう思い続けたい。

ことう・ふたば ● 東京生まれ、元・辺境旅系ライター。軽井沢の浅間山麓に住み、現在はデザイン・縫製を主な生業としている。布集めの旅は今も変わらず、どこへでもザックを担いで行く。布服屋リンコル店主。



左から紅帽ヤオ族、アカ族、黒モン族、モン族の手仕事の布。  
下に敷いているのはハニ族の服の一部、藍染木綿だ。  
いずれも古いものだが、実に丁寧に作られている。  
量産された安価な布がなかった時代、  
どれほど女たちが布を大切にし慈しんだかが見て取れる。



①



②



③



⑤



④

- ① アカ族の女性は銀色の飾りを好んで付ける (西双版纳勐海)
- ② 祭り見物に出かける彝族女性たち (凉山布拖)
- ③ ハニ族女性の腰当ては見事な刺繍で埋め尽くされていた (西双版纳勐海)
- ④ 路地で布を織る彝族女性とその家族 (凉山布拖)
- ⑤ 機織りをする女性、水族と思われる (西双版纳勐海)